

# 住民主導で施設をつくり運営



## 文化

余目町文化創造館「響ホール」 山田 勇夫

余目町は庄内平野のほぼ中央に位置し、北に秀峰鳥海山、南に霊峰月山を仰ぎ、最上川と京田川に挟まれた、緩やかな勾配をなす平坦な地形の町であり、また山林原野が全くなく総面積の約七〇%を美田が占める所である。

四季折々の風影を採りなす自然の豊かさ、地の利に恵まれ、昔から交通の要所として発展してきた町である。

自然的観光に恵まれない本町は、前々から手づくりの観光イベントや、芸術文化活動が盛んに行われ、ジャンル別によるサークルも多く「心の潤い」として日頃から練習や発表会等が行われている。中央や地方を問わずその道で活動している方々も多く、情報の収集や、交流等を通じ、技術などを含め資質の向上を図っている。

このように芸術文化に意をもつ人々が多いなか、「余目町芸術文化振興協会」より、音響に優れて、固定席を有する文化施設の建設についての請願が町議会に提出された。

これらを踏まえ、町として早期実現を図り、また、特色ある施設とするため平成五年七月、「仮称・余目町文化センター建設構想策定検討会」が設置され、文化創造施設や図書館、美術館も含め「文化の森」をイメージした答申がなされた。

この答申を受け、施設の規模や席数等の基本構想及び建設場所について検討するため「余目町文化の森建設委員会」が設置され、建設場所及び事業規模などを中心とした答申がなされた。

前述の検討はハードを中心としたものであり、施設の運営や管理の在り方等、ソフト的事項についても検討する必要があった。

このため平成七年七月、再度「文化の森建設委員会」に設計競技実施要項の検討を含め諮問した。同年十二月までの短い期間の中で十六回にわたる委員会が開かれた。

その間、北海道大学教授、森啓氏の指導や先進地視察を数回実施、さらに町民の意見を聞く文化ホールと町づくりフォーラムの開催

等、精力的に検討された。

前述した一連の検討会議やフォーラム等の開催により建設の機運が高まる中、設計競技等具体的な検討が行われ、六業者による設計競技公開ヒヤリングを開催、委員や参加した町民との間で白熱した意見交換が行われた。「設計競技公開ヒヤリング」は全国でも珍しいケースとして新聞報道等で注目を浴びたところである。

文化創造施設は町民憲章に定める「広い視野と学ぶ心を身につけ、文化の薫る町にしましよう」及び、町総合計画の基本目標「学ぶ心を育み創造性豊かな文化の薫る町づくり」の具現化として、また、庄内地方拠点都市整備事業の位置付け、さらには前述した長い歳月とあらゆる視点から検討してきたその集大成として「文化の森構想」の核施設として総事業費三十億円を投じ平成十一年十月一日オープンしたものである。

こけら落とし事業は国際的ピアニスト「中村紘子ピアノリサイタル」を企画。前売りの



段階で午前九時からの販売開始が、午前三時から行列ができ、わずか三時間足らずで完売した。

鑑賞者から一様に「まさにこんな素晴らしいところがあったのか」「別世界にきたみたいなのだ」「とても感動したけ」等の声があった。

このような声を聞くことにより基本理念としている「住民一人ひとりが、恵まれた文化環境の中で生きる喜びを実感し、生涯にわたる心豊かな生活を営む」ことができる拠点として、また「芸術文化活動の活性化と、華やかで活気と楽しさあふれるまちづくり」の一端を担うことができるとの自信をもつことができた。

特に大ホールは残響音を重視した音響反射板を設け、約六百人収容可能なものとし、美しく豊かな音響とサラソンのな雰囲気をもつた、いわゆるシューボックス形式の空間とした。

音響反射板を開けることにより劇場として、また、どんなジャンルにも対応できるような舞台を変えられるようになっていく。

小ホール（二百人収容）はリハーサルや交流プラザゾーンとして円形の総ガラス張りであるため外部（前庭）と一体化されて明るく、また練習風景が見学でき、にぎわいと躍動感を醸し出している。

このようにこだわりをもって整備したことにより、これまで施設の制約上行うことができなかった高度な演出や各種の催しを行うことを可能にした。

国内外のプロの演奏や演劇等、質の高い芸術文化に触れることを容易にしたことにより「あの人のコンサートを聴いてみたい」「ステージに立ってみたい」といった夢をかなえる場、感動する場、そして楽しみの場として位置付けられている。

住民主導、すなわち真に自分たちの施設として、自ら企画し、自ら実践していくスタイルをどう構築していくか、さらに多様な住民ニーズをどのように把握し、事業に反映していくか、答申の趣旨等も踏まえながら、二十八名の構成による「響ホール事業推進協議会」を平成十一年一月設立、この会は住民ニーズを踏まえながら自主事業の運営や、基本事項を協議する場としている。

この親協議会の下部組織として、「企画運営委員会」を設け区内全体から応募があった二

十八名で構成。いわゆる企画プロデューサーであり、親協議会の方針を基に、自主事業の企画や宣伝方法、販売戦略等ジャンル別班編成をしながら日夜精力的に活動している。

すべてボランティアであり、好きな方々とはいえ感謝している。さらに、当日の役割を主たる任務とするボランティアを広域的に公募したところ三十八名の応募があった。

このような、住民を主役とした企画・運営システムを確立したことによって、企画制作能力の育成や、住民ニーズを反映した事業の展開、さらには幅広い住民の多様で柔軟な参加態勢を確保し、これまでの自主事業すべてのチケット完売につながっている。

これらをどう継続していくか、また、経費のすべてが町負担であり、限りある町財政の中で効率的運営はどうあればよいか、求められる課題である。

こだわりをもって実現した「響ホール」。感性的豊かな住民の育成と、文化的生活の向上のみならず、広域的な人の流れをつくり経済的波及効果と、活気あるまちづくりの一端を担っている。

## 山田 勇夫

1938年余目町生まれ

余目町役場住民課長、企画課長を経て、1998年3月退職。同年4月文化創造施設専門員。1999年10月文化創造館[響ホール]支配人に就任、現在に至る。